

【山陰インバウンドニュース12月号】

令和3年12月27日
(一社)山陰インバウンド機構

旅館・ホテルと連携した新たな販売ネットワーク構築事業

国宝松江城を活用した新たな滞在型観光商品開発の取組を松江市長に報告

山陰インバウンド機構では、宿泊客の消費活動の中心となる旅館・ホテルと、その周辺地域の魅力ある地域資源を組み合わせた滞在型観光商品の造成・販売を通じて、訪日客による山陰各地域での消費活動が促進される取組を進めています。今回、松江市のホテルと連携し新たに松江城等を活用した滞在型観光商品を開発したことから、12月22日、当機構の福井代表理事が上定市長を訪問し、これまでの取組と今後の展開について報告を行いました。

福井代表理事より、松江ニューアーバンホテル及び玉造国際ホテルと連携し開発した「松江城早朝登閣体験」や「職人の技（漆器・お茶）体験」を織り交ぜた観光商品について説明。これに対し、上定市長は、「松江市には日本人や外国人にも刺さる本物の日本を伝えることの出来るコンテンツが数多く存在する」とし、このような地域資源を活用しながら周辺市町とも連携しつつ観光消費拡大の為の取組を進めていくことが必要であると述べられました。

同席された松江ニューアーバンホテルの植田社長は、「地域に利益が回ることが重要。松江の上質な体験を提供できるよう検証していきたい」とし、行政との連携が今後必要不可欠であることを伝えられました。更に、次年度以降もこのような取組を継続していくことで、滞在する旅行者の満足度向上を図り、松江市全体の観光収入の増加、活性化につなげていく必要があると述べられました。

当機構では、コロナ後のインバウンド回復を見据え、行政、観光事業者等と連携しながら、引き続き、商品開発の取組を進めていきます。



山陰インバウンド機構と島根大学による観光人材育成の取組「山陰ツーリズム人材育成塾」

塾生が石見銀山でフィールドワークに参加しました

「山陰ツーリズム人材育成塾」の塾生が12月4日、世界遺産・石見銀山の太田市大森町でフィールドワークに参加しました。

育成塾は、持続的に観光地域づくりに取り組むことができる人材や地域で新たに観光事業に挑戦する人材の育成・輩出を目指し、島根大学と連携して実施しているもので、当塾には、現在、鳥取・島根両県の観光業従事者や起業を目指す人材を中心に21名が参加しています。

8月の開講以降、主にオンライン上での知識習得講座やゼミに参加しながら観光事業に関する専門的な知識を学習してきた塾生にとって、今回のフィールドワークは初めての現地での活動となりました。

当日参加した塾生13名は、石見銀山群言堂グループ社員の案内で、石見銀山領の中心地でもあり、昔ながらの伝統的な歴史的文化的財と生活が共生する大森町の町並みを散策。世界遺産を構成する町並みは、歴史的な資源を活かしたまちづくりを進めていくという理念のもと、半世紀以上に渡る関係者の努力により維持されてきたこと、このような地域の理念に共鳴した多くの若者の移住が相次ぎ大森町の人口増加に寄与していることを学びました。一方で、「世界遺産登録後の急激な観光客増加は地域住民に大きな影響を与えることになった。」と観光振興と住民生活との調和の難しさについても説明がありました。

今後、塾生は観光商品開発や地域課題解決に取り組む予定であり、来年2月には事業成果報告会が開催される予定です。



「Discover Another Japan Pass」参画施設のご紹介

塩谷定好写真記念館～ノスタルジーを感じる作品と建物～

当機構では、中国地方の外国人個人旅行客の市場創出や山陰への誘客多角化に向け、観光施設や交通機関を利用できるデジタル周遊パスポート「Discover Another Japan Pass」（以下、「DAJP」という。）を開発。現在、魅力的な観光施設や交通機関、体験コンテンツを掲載するなど、「DAJP」の更なる魅力度向上に努めています。今回のインバウンドニュースでは、新たに「DAJP」に参画いただいた塩谷定好写真記念館をご紹介します。

塩谷定好は、大正から昭和期初期にかけて、生涯にわたり故郷である山陰地方を撮り続け、日本芸術写真の草分け的存在として活躍し、海外でも高い評価を得ている写真家です。彼の生家と隣接する蔵をリノベーションし、2014年に開館した「塩谷定好写真記念館」は、昔ながらの風情を残す赤碕の旧街道に佇むように建っています。

12月下旬、当館を訪問し、定好のお孫さんで現在この記念館を管理されている塩谷晋館長にご案内いただきました。

初めて定好の写真を見た際の印象は「懐かしさ」。モノクロームのソフトフォーカス（※特殊なレンズやフィルターを使い、被写体の像を柔らかくぼかしたように表現する技法）で表現された情景は、この写真館の日本家屋の雰囲気と相まって、懐かしさを強く感じさせました。塩谷館長曰く、「多くの方が同じような感想を述べられます。定好は山陰の自然や人物を被写体に1枚1枚、時間をかけて作品を創り続けました。そのように丁寧に生み出された作品が見る人にそれぞれの思い出を呼び起こすのではないのでしょうか。昭和初期の山陰の自然や町並みを映した写真は資料的にも大変貴重なものです。」

ギャラリー棟と反対側のスペースでは、明治39年築の歴史ある家の造りと共に、塩谷定好の生前の品々を見学することができます。「定好の生家は、北前船の寄港地として栄えた赤碕で代々船問屋を生業としており、多くの貴重な品々が受け継がれています。建物（国の登録有形文化財指定）自体も貴重なもので、建築の専門家の方も見学に来られるほどです。」

最後に庭園が見渡せる併設カフェでお話を伺った際、館長から次のようなメッセージを頂きました。「当館には国内外から写真に詳しい方が多く来られます。植田正治写真美術館と一緒に回るのが定番のようです。一方で山陰自動車道から少し外れているせいか、一般の方の訪問は比較的少ないように感じます。山陰の方はもちろん国内や海外の方にも当館に足を運んでいただき、定好の作品や建物、そして赤碕の町並みを見ていただくと嬉しいです。」

写真だけではなく、歴史ある日本家屋の造りや貴重な品々の展示、レトロ感あふれるカフェなどが楽しめる「塩谷定好写真記念館」に、皆様も一度、足を運んでみては如何でしょうか。

（塩谷定好写真記念館 <http://teiko.jp/>）



（写真館の外観）



（今回、ご案内いただいた塩谷館長）



(ギャラリー)



(廻船問屋として栄えた往時を思わせる建物・貴重な品々)

【12月9日開催】山陰インバウンドセミナー

「観光を通じた地域起業の挑戦」開催の動画を公開しました

12月9日、Entô CEOの青山敦士氏を講師にお招きし、オンライン上でインバウンドセミナーを開催しました。今回のセミナーでは、自ら隠岐海士町に移住し当地で観光による地域振興に取り組んでこられた青山氏から、「観光まちづくり」を進めていく上での課題や留意点等についてご講演いただきました。

青山氏は「海士町の魅力はどこから生まれてくるのかを考えた際、地域の中で挑戦する人材がキーワードになっていることが明らかになった。観光だけでなく様々な分野でいかに挑戦する人材を増やすか、地域づくりとしても非常に重要なテーマになる」と説明。さらに、「出やすいから入りやすい。人材の流動性が地域の活性化を促す」とし、移住のハードルを下げる「マルチワーカー制度」や全国各地の若者向けの就業体験移住制度「大人の島留学」など、これまでの海士町での取り組みについて説明されました。

セミナーの様子は、機構の公式YouTubeチャンネルで公開していますので、見逃された方は、是非、ご視聴ください。

【機構公式URL】https://www.youtube.com/channel/UCx4vy7n85H44dEzx_1I2VJg

山陰DMO

検索

観光関連統計等

山陰への訪日外国人延べ宿泊者数※観光庁宿泊旅行統計調査（従業員10人未満の施設を含む）

期間	山陰への訪日外国人宿泊者数（鳥取/島根）	比較
2021年9月	1,470人泊（鳥取820人/島根650人）	(2020年9月) 1,190人泊 (2019年9月) 16,050人泊
日本全体の現状 2021年9月 (速報値)	274,100人泊 ※観光庁宿泊旅行統計調査 https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/shukuhakutoukei.html	(2020年9月) 225,740人泊 (2019年9月) 8,260,400人泊